

アフリカの農業・農村・農民

岸 真由美

本誌今号の特集にあわせて、本コーナーでは、現代アフリカの農村・農民のくらしや農業のあり方を、知るのに役立つ学術書を紹介する。

島田周平著『アフリカ 可能性を生きる農民——環境—国家—村の比較生態研究』（京都大学学術出版会 二〇〇七年）は、ナイジェリアとザンビアの農村を事例として、アフリカの農村と農民の暮らしを総合的に描いている。島田氏によれば、二地域に共通してみられる特性は、出稼ぎなどにより農民たちの空間移動性が高いこと、暮らしを安定させるため絶えず可能性を探り多くの生業に就いていること、主食となる食糧の生産は保持しつつも様々な機会を捉えて活動する「変わり身の早さ」である。

アフリカで主食として栽培されているのは、キャッサバやヤムイモなどのイモ類やトウジンビエやシコクビエ、モロコシなどの雑穀である。こうしたイモ類や雑穀はほとんどが焼畑農法で栽培されている。

小川了著『世界の食文化⑩ アフリカ』（農山漁村文化協会 二〇〇

四年）は、マリの「トー」、コンゴの「シクワング」、東アフリカの「ウガリ」など、イモ類や穀類の固粥を例に挙げながら、アフリカ各地の食文化に共通する特徴として、嚙まずに飲みこめるように主食が調理されていること、主食と副食がおなじ器に盛られていること、食事は熱くなければならぬこと、の三点を挙げている。

ところで、近年はアフリカでも都市部を中心に調理が容易なコメを食べるようになってきている。小川氏によれば、セネガルでは第二次世界大戦以降コメも多く食されるようになっており、輸入も増えている。フランスの植民地時代に、同じく仏領だったインドシナから破砕米が輸入されるようになって広まったという。東アフリカでも一九九〇年代以降コメの消費量は増えている。なかでもケニアでは植民地期にはイギリスが、独立後は国家が主導して開発を行いコメが栽培されてきた。

石井洋子著『開発フロンティアの民族誌——東アフリカ・灌漑計画のなかで生きる人びと』（御茶の水書

房 二〇〇七年）は、ケニアのムエア灌漑事業区における米農家の生活戦略を描く。一九八〇年に始まる構造調整政策以降、ケニアでは規制緩和と経済自由化が進んだ。こうしたなか、国家灌漑公社と契約を結んで

コメ栽培を行っていたギクユ人入植者たちは公社の上意下達な管理方法コメの公定価格の低さや入植第二世代に対する水田用益権の制限などに不満を募らせる。これがやがて九〇年代後半のコメ自由化運動につながり、農民組合が灌漑事業を脱国営化した一九九九年、ついにコメ自由化が実現し、コメ価格は倍になる。しかし、水田の急激な拡張による農業用水の枯渇や農民組合による代金不払いなどにより、農民の生活は大きく変わり不安定さも増した。農民たちは、日雇い労働者でなく家族をコメ作りの労働力として使ったり、親類を通じて遠隔地でコメ販売を行ったり、さらにはブレンド米の路上販売や精米所の経営、密造酒の製造・販売、現金貸付などの様々な生活戦略をとりながら、経済自由化の波を生き抜いているのである。

アフリカで栽培される輸出換金作物にチョコレート原料となるカカオがある。一般的に輸出作物栽培という、ケニアの茶畑のように外国資本によるプランテーションがイ

メージされるが、アフリカのカカオ栽培は、アフリカ人小農の小規模経営がほとんどである。

四方篤著『焼畑の潜在力——アフリカ熱帯雨林の農業生態誌』（昭和堂 二〇一三年）は、カメルーン南東部のバンガンドウ人の村で実践されている、焼畑にカカオ栽培を組み込んだ農業を考察する。バンガンドウの主食はバナナである。焼畑による森林開墾の後、まずトウモロコシやキャッサバ、バナナを植え、次にカカオの苗木を植える。カカオの樹が直射日光に弱いいため、樹の周りに半日陰状態を作るのである。植え付け後、先に挙げた順番で主食作物が収穫できるようになり、五年ほど経過するとカカオの樹が生育する。人びとの生業において、主食のバナナが通年を通して収穫できることが最も重要であり、カカオ生産は追加的な現金収入となっている。ここでは、カカオ畑は常畑化するのではなく、通常の焼畑と同様にいずれ「森にもどる」という。

ちなみに、各章の間に著者のエッセイ「バナナ日記」が挿入されていて、バナナをめぐる人びとの暮らしの諸場面が描写されている。併せてお読みいただきたい。

（きし）まゆみ／アジア経済研究所 図書館